

ふる里探訪

文／水上薩摩

岩石城の攻防

豊臣秀吉が岩石城を攻めたのは天正十五年四月一日（今から四百九年まえのことです（もちろん月日については異論もありますが）秀吉がなんのため岩石城を攻めたのか、直接の原因みたいなものは、大友義鎮（宗麟）と島津義久との争いで、大友側が負け続けてどうしようもないでの、宗麟が秀吉に助けを求めたからということですが、ほんとうは秀吉は自分が天下を統一するためには九州を平らげねばならないと考えていたので、宗麟の頼みを聞いて「これ幸い、軍を動かす口実ができる」とばかりに九州にやつてきたということが本当のことでしょう。

秀吉が小倉に着いたとき、北部九州の所々に根拠を持つていた豪族は争って秀吉のもとに駆けつけ、隨從の意を表わしたということです（城井の宇都宮氏だけはしぶしぶ行つたということです。）このころ岩石城は秋月の出城で、秋月は島津と手を結んでいたため、秀吉に従うわけはない、それどころか、上方からやつてきた武士たちに九州勢の強さを見せてやろうぐらいの気持ちで岩石城で待ち構えていました。

城を守るは、芥田悪六兵衛（大手側）熊井越中守（搦め手側）の秀吉は、小倉から馬岳、油須原（柞原）を通つて丸山に千成、鷲筆の旗印を立てたようです（一説に杉原山ともありますが大手側から岩石城がよく見える場所は真木の丸山が最適です。）（つづく）

二将に率いられる兵約三千人。これを攻めるは大手側（西側）から蒲生氏郷の兵二千余、搦め手（東側）から三千余、総大将としての羽柴秀勝の兵五千余（この数字の信頼度は？です）で攻めたといわれます。秀吉はこの城を一旦に攻め落とせと諸将を励ました。天下で日の出の勢いの秀吉の軍勢が、小城ひとつを落とすのに手間どつてゐるではみつともない、これから九州全域を平定するのだ、自分に逆らう者への見せしめに一朝で攻め落とせというわけです。攻撃軍は勇猛な城兵たちの反撃にもかかわらず、鉄砲の多さと大兵による攻撃をくりかえし、秀吉も蒲生軍の猛攻を遠目に見て、一番乗りをした武士に陣羽織をやつたりして励ましたということです。激しい攻撃の反復にも耐えて奮戦していた城兵たちに、いよいよ最後の時がきました。城に火をかけられたとき城兵のうちの数十人が秀吉の居所、丸山（真木のあたり）を目指してまっしぐらに突っ込んできましたが、蒲生軍と秀勝軍に挟み撃ちにされて全滅したということです。

ふる里探訪

文／水上薩摩

岩石城の攻防

岩石山に今でも残つている
石垣

岩石城の戦いは激戦であつたことは想像されますが、詳しいことは分かりません。城兵がどのようにして防戦したかも分かりませんが、城側の戦法の一つを、攻める側の細川藩の記録『藩譜細要』の中から、少しばかり原文を直訳に近いかたちで表現しますと、

「諸将ひとしく進みて三方を取り巻き、わざと山の手をあけ置き、火を放つて攻めかかつたのに、敵（城側）は城戸を開き牛馬三百匹ばかり繋ぎ合わせ、尾に炬火を結いつけて追い出し城主熊井久重が銃兵を勝つて打つて出候間、寄せ手驚き乱れ騒ぐ処に、松井康之先にあつて衆を励まし、忠興君の御昇少しも動かず云々」

とあり、康之の指示で筒先をそろえて牛馬を打ち伏せ、敵がちょっとひるんだところに切りかかつて五六十人討ち取り、残りは城へ逃げ帰つたということです。牛を使つて兵糧などを運び上げてそのまま山の上に留め置き、まさかの場合は兵糧の足しにするつもりでいたにしても、牛馬三百匹は話が大き過ぎるようです。あちこちから軍勢が集まつての戦いであるから、自軍の戦果を大仰に記録したものと思われます。しかし、秀吉もこの働きを認め、即時に使者をもつて賞詞を贈つたとあります。これを見た他の蒲生・前田・日野などの軍勢も勇み立つて攻め立てたということです。

太平洋戦争前までは新城のあたりの田んぼのあちこちに無縁墓があり、また真木の北方の小山にも昔からたくさんのがつたといわれています。山本さんのお宅の付近の山には無数の無縁墓のものと思われる川原石が中腹に集められた古い祠があり、毎年八月に供養をしておられます。また、すぐ近くの日向さんのお宅の裏山にも寄せ墓として立派な慰靈碑が建立されています。このあたりは岩石山が真正面に見える位置で、ここ地名は丸山といいます。頂上付近はかなり広く、炭住が二棟あつた跡が残っています。

城兵達が九州勢の意氣をみせてやろうと突入をはかり、あえなく全滅したことは前回で述べました。このほか、岩石城の戦いを書いた本として『応永戦乱』があります。これは、大友家の内紛を書いたもので、その中には岩石城の攻防などが詳しく書かれています。特に地名などもよく調べており、大変面白く、いろいろな書き物に引用されています。しかし、これほど大きな戦いに関連する他の書物はなく、歴史資料としての価値は、疑わしいといわれています。

ふる里探訪

文／水上薩摩



▲山上にまつられる白山宮奥の宮

岩石城の攻防

生きながら、平素から天下の情勢を的確に把握することに努めなかつたのである。

秋月二十四支城のうち最強の岩石城が、なぜあっけなく一日で落城したのか。

第一に、兵力の差が大き過ぎた。城兵の数千に対して、攻撃軍は数万の単位（実際に攻めかかったのは五千ぐらい）である。それに、鉄砲の数が多かつたという。激しい鉄砲の音が、大隈まで聞こえたといふからすごいものである。

第二に、秋月方は情報収集を軽視した。当時、秋月は北部九州の雄ではあったが上方の事情に暗く、秀吉の西下を知つて重勢の様子を探るために、家臣の恵利暢寛を偽りの降伏使として派遣した。暢寛は広島で秀吉に謁見し、命令どおり降伏を申し出て秀吉を安心させ、急ぎ帰つて秀吉軍の様子を語り、島津と手を切り秀吉の幕下に入ることを勧めた。しかし、城将秋月種実始め重臣たちはこの報告を聞いても全く理解せず、逆に暢寛を卑怯者呼ばわりした。暢寛は自分の報告を信じてもらえないことを残念に思い、種実への最後の諫言として、およそ三枚ばかりの広さの大岩の上で、妻と娘とともに自己決したという。（秋月町には、今もその大岩が残されている）

秋月は戦力の差がこんなにあるとは知らなかつた。戦国の時代に庄屋を勤めた人で俳人である。

自軍の力を過大に信じ、無謀にも戦つたあげく岩石城は全滅した。

秋月父子は四月四日、天下の三名器といわれる「橋柴」の茶入れと自分の娘と米千石を差し出して降伏したという。その上、今まで手を結んでいた島津を攻める先頭に立たされた。これでは岩石城で戦死した将兵は浮かばれない。

岩石城の二人の城将の墓といわれるものが、添田中学校の付近にある。おそらく後世の建立と思われるが、この墓はなぜかたびたびあちこちに移され、現在の場所に建立されている。一基とも表面の字はつきり読めないが、一つの墓の背面には、

夜となく現に思う連かな

砂水仙人

もう一つの墓の背面には、

一鞭に飛び越えにけり三途川

津美の手綱に○○南冥？

（墓のことは「岩石城」より）

砂水とは中央公民館の前庭にある芭蕉碑を建立した砂水と思われる。また他の墓が龟井南冥では両者の年代が少しずれる。「懸命に戦つて戦死したのに墓もないでは浮かばれまい」ということで墓を建てたのではないだろうか。砂水は天保五年以後、添田手水の大庄屋を勤めた人で俳人である。

ふる里探訪

文／水上薩摩

岩石城の城主

岩石城は平清盛が保元二年（一五七年）、大宰府の大式に任命されたとき、その臣大庭景親（一八〇年没）に命じて築かせたと

いうことです。

◆武装した宗信が、妻と盃を交わしている「大和女訓・中」の挿絵

大庭景親は、平治の乱（一一五年）の際、罪を得て罰せられることになったとき、清盛に助けられたため、その後、清盛のためによく働き、本領地の相模に土着しました。しかし、景親は源頼朝追討のとき千騎を引き連れていたほとど武将です。多忙のため九州のこんな奥まった所に長くは居城されなかつたと思われます。

なお、清盛も大宰大式に任せられても着任はしませんでした。天治（一一四年）のころから地方の最高級官吏はみんな遠国への着任はしなかつたのです。（遙任）

清盛は、西国に勢力を扶植しようとして景親を北部九州に派遣したのでしょう。

最後の城主（城代）は、細川忠興の家臣、長岡宗信です。この人に関しては、江戸時代中期の著名な神学者、井沢蟠龍の著書「大和女訓・中」に次のような一文があります。少々現代向きの内容では

ありませんが要点を掲げますと、宗信が主家の内紛で思ひぬ罪を受け、討ち手を向けられるよ

うになつたとき、宗信は、主君の措置が納得できないとして討ち手と戦い切り死にしようとしたが、妻は実家の方から助命運動があつて、なんとか脱出できるようになりました。ところが宗信は三年も前から妻を寄せつけず、別の女性を愛していました。それにもかかわらず、妻は「日ごろ同じ家に住みながら疎遠にされていても、夫の死に際して館を抜け出すことは人の道に背くことです」と言って救いの手を断りました。このことを知った宗信は、初めて自分の非を悟つて、「今まで自分が悪かった」といつて共に最後の盃を交わしたそうです。

この本には、武装した宗信が、横に薙刀を置いて妻と盃を交わしている挿絵がついています。この事件は、慶長九年のこと。この話は世間に広まり、女性の鑑とされたそうで、宗信の最後は自決でした。宗信の父宗祐は、龍王城（安心院町）の城代で、同時に討ち手を向けられましたが大いに戦い、討ち手側にかなりの損害を与えたそうです。

その後、岩石城には二人の藩士と中小姓が五、六人交代で勤めたそうです。

井沢蟠龍には、多くの神学書のほかに「武士男子訓」や「名君家訓」などの著書があるそうです。



ふる里探訪

文／水上薩摩



▲ 岩石山（左）と弓張山（右）

神話の岩石山

岩石山に最初にやつてきた神様は、朝鮮半島の曾褒里に住んでいた三兄妹の神様だといわれています。中央の山（岩石山）には男の神様が住まれて兄山と呼び、南に連なる山（弓張山）に姉神が住まれて兄姫山、北に連なる山（葛城山）に妹神が住まれて乙姫山と呼ばされました。

曾褒里の神様は、岩石山にやつてきたとき、木の種をたくさん持つてきました。そして、山いっぱいにまきました。すると、今まで荆棘ばかりであった山々が、たちまち緑したたる木々の茂った山となりました。また、山の周りに雪もよくでき、雨が降るようになり麓も緑の野原となりました。里の人々は兄山を曾褒里山と呼び、西側の野原を曾褒里野と呼ぶようになりました。

ところがある日、曾褒里の神様より強い神様がやってきて、「私は大己貴命（大国主命）である。日本國を開いて今は残っているのはここだけである。だからこそは私に任せて、あなたたちは向うのほうに行つてよいぞよ」と言いました。そこで、曾褒里の神様たちは谷に寄つた端っこに居場所を移しました。

そうしているうち、またまた新

たに強い神様がやつてきました。そして、「私は、天忍穗耳尊（英彦山神宮主神）であるぞよ。近いうちに天孫瓊々杵尊が天降るのであるが、この山は立派な山であるから前々から私が占めていた山である。そういう訳であるから、あなたたちはみんな隣の山に移りなさい」と言われました。（以上、白山縁起から）

そのうちに、曾褒里野はだんだん開けてりっぱな田園になつたので、曾褒里野を「曾褒里の田」と呼ぶようになり、さらに「曾褒里田」が「添田」となつたのではないかとも考えられます。

「日本書紀」の卷第一「神代第九段に、「時に降致ましし處をば、呼いて日向の鰐の高千穂の添山の峰と曰ふ」とあり注記に、「添山、此をば曾褒里能耶・麻と云う」とあります。これによると、「添」という字を「ソホリ」と読ませているのです。これが「添田」の地名の起りではないか、というのは無理でしようか。

また、古代朝鮮の「ソホリ」とは特定の地名でなく、「町」とか「集落」という意味だそうです。外国からきた神様で、近くでは香春町の辛国（さきのくに）息長大目大姫がおられます。

※六月号で「藩譜細要」とあるのは、「藩譜採要」の誤りです。お詫びして訂正いたします。

ふる里探訪

文／水上薩摩

岩石山と佐々木小次郎

宮本武蔵との決闘で有名な佐々木小次郎が添田の出身だという説があります。小次郎は彦山で山伏流の剣法を学び、さらに岩石山で修練を積み、独特の燕返しの秘剣を得ました。だから岩流というのだそうです。

根も葉もない話か、あるいは岩もれていた真実か。吉川英治氏の「宮本武蔵」では、小次郎は剣は強いが人格形成が不十分なように

書かれているため、損な立場になってしまいます。数年前、NHKのシリーズ「歴史発見・仕組まれた巖流島」という番組の中で、ゲスト出演した作家の笹沢左保氏は、「小次郎は小倉細川藩によって謀殺されたものである。元和元年、豊前の地に封じられた細川氏は土着の佐々木氏を認めていたが、あまり勢力を持つても困る、それで武蔵を利用して決闘の形で処分したものであろう」と、語っていました。

また、香春町出身の郷土史研究家の原田夢果史氏（故人）が、昭和五十七年に郷土史「かわら」第十七集で発表したものによれば、

「細川忠興が小倉在城のとき、豊前彦山下の出身である佐々木岩流なる剣士が城下に来て剣術の道場を開いた。彦山の山中で修練道の秘法を修業し、岩石山頂で奥義を得し岩流と名乗った。道場は大繁盛、藩士の入門も多かつたが困つたことに、門下で乱暴を働くもの

が増えて、目に余る行為が多く、だれもこれを取り締まることができない。家老の松井佐渡守は策を練つた。宮本武蔵が招待され、小倉に道場が開かれ、二刀流が教授された。当然、両道場の門弟たちの間に師の優劣が論争され、ついに両者は立ち合うことになった。

武蔵は戦略的のこととは知らないが、この時点で謀殺に利用されたことに気づいたのである。試合後、武蔵は家老の一人、沼田延元の預かる門司城に一時庇護された。

▲岩石山山頂（天気の良い日には、周防灘が見えます）

佐々木氏は鎌倉時代、副田荘の地頭に任命され、大内氏時代はその配下に入り、岩石城を根拠とした。佐々木氏は大蔵姓である。また、謡曲「花月」のモデルとされ、天狗にさらわれた花月童子親子が再会したとされる京都の清水寺は、大蔵氏の祖先の一人、坂上田村麿の氏寺である。

郷土史「かわら」参考

かくして舟島（巖流島）での決闘が行われ、結果は小次郎が敗れた。いつたん倒れた小次郎は息を絶つた。宮本武蔵が招待され、小倉に道場が開かれ、二刀流が教授された。事前の約束通り岩流は一人でやってきたのに……。